

すばらしいプリピャチの町での暮らしと、チェルノブイリのもたらした不幸、 原発事故と私たちの人生の破局について

タマーラ・ヴラディーミロヴナ・ディーカヤ (竹内高明 訳)

私は、この話を、私の生まれたあのすばらしい自然の一角のことから始めたい。レスコノーペという名のその村では、家々はみな小さく、木々の濃い緑に隠れるようにして建っていた。村全体が高みにあり、村の一番高いところに立つと、村のすぐそばを流れる川の美しさが一望できた。その川はデスナ川の支流である。川のこちら岸も、対岸も、丈の高い緑のガマと森とおおわれていた。この生まれ故郷をしばしば訪れている私も、土地の美しさに見飽きるということがない。すばらしい景観を前に呼吸が速くなるほどだ。広々とした草原、森、流れの速いデスナ川のすべてがあいまって、これほど美しい場所はどこにもないだろうと思わせる。



キエフのゼムリヤキ事務所にて、2006年9月。

私の通った村の学校では、自然を愛すること、年長の人に敬意を持って対すること、勉学に励み、よい成績を得るよう努力すること、労働を愛することを教えられた。これらすべてのことについて、私は最初の教師たちに一生感謝している。子ども時代を振り返る時、村のコンサートでどんなに誇りを持って歌ったかが思い出される。何かの祝日には、学校の生徒たちがいつもコンサートに参加していた。8年生の勉強を終えた後、9年生と10年生の学業は地区のウシンスキー記念寄宿学校で続けた。昔の年代記にも出てくる、古い歴史を持つ地区の中心地ノヴゴロド・セヴェルスクから、イーゴリ公はポロヴェツ人討伐に出陣したのである。寄宿学校で私は勉強に精を出し、クラブ活動にも参加した。私は歌を歌うのが大好きで、将来も歌を続け、聴衆の前で歌を披露し続けるのが夢だった。

10年生を終えて、私は大学の入学試験を受けることにした。夜間の予備コースに通い、昼間はコストロマー市の機械製作工場の製鋼部で、電気炉の制御盤係として働いた。しかし大学の機械製作学部に入学することはできず、私は実家に帰った。その時、親戚の男性が村の実家に帰省し、プリピャチでの就職を斡旋してやると申し出て、彼が住んでいるこの町のことを自慢し始め、若者の町なんだ、おまえにもプリピャチにあるものは何でも気に入るぞと請け合った。

秋、私はこの親戚を頼ってプリピャチに行き、最初は彼のうちで厄介になったが、ひと月も経たないうちに、町の緑化の仕事を世話してもらうことができた。私は重労働を恐れたことは一度もなかった。職場で寮をあてがってもらうこともできた。この静かで小さな町、住民の大多数が若者であるプリピャチが、どんなに私の気に入ったことだろう！ その時、青春はその翼を広げ、私は空に飛び立っていったかのような感覚だった。それは私の人生で最も幸せな時期だった。

私は自分の青春、プリピャチに来て働き始めた頃のことをよく思い出す。寮では新しい友だちがたくさんできた。その一人は、働く若者の音楽サークルの指導者と知り合いだった。サークルのメンバ

一は、主に私より5歳、あるいは7歳は年上の人たちで、すでに結婚しているメンバーもいたが、みな音楽に入れ込んでいた。彼らは仕事の終わった後、音楽室、つまり男性寮の一室で、いろいろな楽器があり、サークルの練習に使われていた部屋に集まった。そこにあったのは、ドラムス、シンバル、ベース・ギター、リズム・ギター、リード・ギター、電子オルガン、サクソフォン、トランペット、電子バイーンで、それらすべての責任者になっていたのは、サークルの音楽主任スタニスラフ・イヴァーノヴィチだった。

ある時、私が歌うのを聞いた友だちは、スタニスラフ・イヴァーノヴィチに会って見ないかと勧めた。ある晩、私は彼女と音楽室に行った。何か歌って見ないかと言われて私は歌い、スタニスラフ・イヴァーノヴィチは私の声がとても気に入った。こうして、私にはまた新しい友だちができ、私は音楽サークルで歌うことになった。その時、生の伴奏で歌えるようになって、私はささやかながらも自分の夢がかなったと思った。毎晩終業後、リハーサルや新しい歌の練習に急ぎ、友だちと話し合うのが、どんなに楽しく、うれしかったことだろう！

夏の祝日には、プリピャチの文化会館前でコンサートがあり、それには私たちと同じようなサークルがたくさん出演した。1981年、1982年のそうした日々は本当に幸せで喜びに満ちたものだった。原発建設作業員たちの催しで歌うこともしばしばあった。最初、私は何か説明し難い恐怖感を味わったが、やがてもっと度胸が据わるようになった。そして、楽しい、屈託のない日々がすみやかに過ぎていった。だが夏の宵、文化会館のそばで、私たちの町はなんと美しかったことだろう！ 白い芍薬やティーローズが、かぐわしい香りを放っていた。町にはバラの花壇も多く、そこからは香気がただよい、白い睡蓮の花が浮かぶ故郷の川をいつも思い起こさせるのだった。バラと睡蓮の香りは、どことなく似通っているのだ。バスターミナルのそばでは松が生えていて、職場に歩いて通う道すがら、それらもふるさとの村を思い出させた。

そして、私たちの町の空気がどんなにきれいだったことか！ たくさんの松が、空気を酸素で満たしていた。私たちは、原発職員たちが毎年原発の稼働記念日を祝うラズールヌィで何度も歌った。こうして、私の青春は、仕事と歌の練習であつという間に過ぎていった。しばらく緑化の仕事をした後、私はラジオ工場「ジュピター」に就職した。この工場は、キエフのラジオ工場である「マヤーク(灯台)」の子会社だった。そこで私は、型打ち部のターレット旋盤工見習いとして採用されたのだった。

同じ班で働いていたのは、ほとんどが17歳から25歳までの娘たちで、35歳を超えているのは4人だった。私は最初、工程が2つしかない機械を使って作業したが、1ヶ月後にはすでに16工程の半自動旋盤で、テープレコーダー「ジュピター」の側面ユニットを研磨する作業をしていた。仕事はとてもきついもので、一勤務時間内にその部品を600枚仕上げなければならなかった。でも、早番の仕事の後には、私は音楽室まで走って練習に行き、仲間たちみんなに会った。遅番の時には、1週間彼らと顔を合わせなかったのだから。ある時、友だちから、編み物のコースで募集があると聞いた私は、編み機の使い方を習ってみたいとなった。そして遅番の仕事に出かける前に、編み機の使い方の初歩から習い始め、それがとても気に入った。

ターレット旋盤工の仲間の女の子たちも結婚し始め、プリピャチから5km離れたチストガロフカ村での結婚式に出た時、私は初めて将来の夫ヴィクトルに出会った。彼は私にその場で惚れ込んだのだという。あとでそのことを私に話したのは、彼のおばあさんだった。彼はおばあさんに、もしある女の子が結婚してくれたら、世界で一番幸せな人間になれるだろうと言ったのだそうだ。でも、この出

会の後丸2年が過ぎ、その間に私は起重機操作系の研修を受け、それを修了した。このコースに通っていたのも、若い男女ばかりだった。

資格試験に合格して、私たちはガントリークレーンでも塔形クレーンでも操縦できるという免許証を交付された。そして、クレーンの仕事を探すということになったのだが、初めてクレーンに上った時、私はあまりにおびえていたので、柳の木の枝で私をおどして操縦席に追い上げなければならなかったほどだった。だが、操縦席に上った後、今度は必死の思いで下りてくることになった。つまり、高所恐怖を克服しなければならなかったのだ。一方、私はサークルでの活動を続けていて、私たちは時々結婚式でのアルバイトもするようになった。私は歌い、仲間たちが伴奏して、愛し合っている若い二人、目を輝かせているカップルの喜びと幸せを目の当たりにするのは楽しいものだった。

さて、私は塔形クレーンの運転手の職を探すことにし、建設局のクレーン課に行ってみたが、そこで言われたのは、数日前にクレーン運転手を雇ったばかりだということだった。職場でサークルの友だちにその話をすると、彼女は、今すぐクレーン課の整備工に電話してあげる、彼が力を貸してくれるはずだ、と言って私をなだめた。そして実際、彼女の電話の結果は、希望の持てるものだった。私は再びバスに乗って、クレーン課の主任整備工室に行き、クレーン運転手の誰かが病欠その他の理由で出勤しない際の交代要員として雇われることになった。

翌日、私は出勤し、保安に関する指示を受けることになっていた。そしてその朝、私は2年ぶりに、将来の夫に出会ったのである。彼は私にまず挨拶をし、それから、チストガロフカで結婚式に出たことはないかと尋ねた。私はあると答えた。すると彼は、「その時写真も撮ったんじゃない？」と聞きながら、自分の机の上の何かをじっと見つめた。しかし私は、誰とも写真など撮らなかったような気がしたのだが、実は私は他の女の子たちと並んで写真に写っており、その私の隣にはヴィクトルが立っていたのである。

職場に置いていたその写真を、夫がチェルノブイリから持ち帰ったのは2000年春のことだった。それまで私はその写真を見たことがなく、彼はいつもそれを持って仕事をしていたのである。これが私たちの2度目の出会いだった。私は、ヴィクトルが整備工として働いており、建設局の上司ともいい関係にあった職場に通い始めた。彼はとてもエレガントに私にアプローチし始めたが、私は、男性の友人の方が女の子の友だちより多かったとはいえ、ごく生真面目なタイプだった。こうして、私はクレーンの交代要員として働き始め、貨物積下し場にあったあらゆるガントリークレーンの操縦研修を受け、その後原発の第2次・第3次建設現場にあったすべての塔形クレーンの研修を受けた。

私はすでに、高みからすべてが見下ろせるこの仕事がとても気に入っていた。私には、お祭りに行くように仕事に通っているという実感があった。出勤するのがそれほどうれしくて仕方がなかったのだ。一緒に働いていた組立工たちは、私の努力と責任感に尊敬を持って接していた。原発の建設に携わっているということ、また、緑に恵まれたすばらしい若者の町に住んでいるということ、私は誇りに思っていた。サークルで仲間たちと歌うことも続けていた。音楽と歌がとても好きだったから。

私とヴィクトルは丸1年付き合い、1984年の春、7月14日に結婚するという約束をした。9月末、ヴィクトルは1DKの小家族用アパートを支給されたが、それは大きな部屋、キッチン、物置、バルコニー、バストイレという間取りだった。私たちにとってはすてきな住まいであり、これでヴィクトルの両親から独立して暮らすことができるようになった。彼らの住んでいた村は、プリピャチから5kmしか離れていなかったけれども、結婚とともに、歌はやめることになった。やがて長男のユーリイが

生まれたが、彼は病気がちで、扁桃炎に罹ったり風邪を引いたりしていた。育児休暇をとってユーライと過ごしていた間、私は、自分の職場の近況やニュース、どんなクレーンを使ってどんな高さの建物の壁を造っているのか、といったことにいつも興味を持っていた。あらゆる建設作業の進行状態について把握するのはとても面白いことだった。

そして 1986 年の春が訪れた。ユーラ[訳注：ユーライの愛称]は、手をとってやれば少しずつ歩くようになり、私たちはよく乳母車を押しながらヴィクトルの両親のところへ行った。ヴィクトルの一番下の弟が兵役に行く時期がやってきた。私たちは送別会の前日からヴィクトルの実家に行き、パーティの準備の手伝いをした。晩になると、大勢の親戚や友人たちが集まってきた。送別会は朝まで続き、私とユーラは外に出ていて、朝 5 時過ぎ、友人と近親たちは車でニコライを徴兵司令部に送っていった。7 時になると、村では原発が爆発したという話が広まり始めたが、私はとても信じられなかった。しかし、チェルノブイリ市の徴兵司令部から戻ってくるはずの車を待ちながら、私は不安を感じ始めた。自分の子どもだけでなく、他の小さな子どもたちと一緒に家に残っていたから。車は、いたるところで道路が封鎖されていたため、森の中の迂回路を走って戻ってきた。原発が爆発したという話はやはり本当だったのだ。しかし、私たちはテーブルを片付けたり、食器を洗ったりし続けた。

午後 3 時になると、警察の職員だったヴィクトルの妹の夫が村にやってきた。彼は、私たちを避難させに来たのだと言った。村の方向に風が吹いており、そのため放射線量が上昇していたのだ。車で走りながら、原発に近い方に行ってみようということになった。レストラン「ユリイカ」の近くまで来て車を停めた時、夫は、子どもと一緒にだからこれ以上先には行かないでおこうと言い、私たちは方向転換した。原発の煙突の付け根では火が燃えさかっていた。コーリヤが警察職員でなかったら、とてもそこまでは行けなかっただろう。こうして、起こった事態の深刻さを理解しないまま、私たちはこの原発事故の目撃者となったのだ。私たちはアパートの屋上にのぼり、夜遅くまで双眼鏡を手に原発の炎を眺めていた。晩にはヨード剤が配られ、アパートの窓を閉めるようにとの指示があった。だが、私たちは起こったことすべてを充分理解していたわけではなかった。

翌日、日曜になると、避難が行われることになり、持ち出せるのは 3 日間の避難に必要なものだけだと言われた。私はユーラと実家に行き、ヴィクトルはプリピャチに残った。ヴィクトルの両親は 5 月 9 日まで村にとどまっていたが、その後ボロジャンカ地区の村に避難させられた。私は避難させられた時のことをよく覚えている。私たちが乗っていたバスは、村々やチェルノブイリ市を通り過ぎて行ったが、路傍には人が立っており、彼らの眼には「あんたたちは出て行くけれど、俺たちはここに残るんだ」という思いが読み取れた。

実家の村に着いたのは、私たちと同じような、子連れの奥さんたち 6 組だった。夫たちは事故の事後処理作業に残ったのだ。地区の中心から来た人が、私たちの着ていた服や靴の放射線量を測定すると、機械は音をたてた。私たちは新しい服を与えられ、着ていたものは没収された。ヴィクトルは当直制で働き、眼に見えず耳にも聞こえない敵と戦っていた。彼は当直勤務が終わった後、私の実家の村に来る途中、若い兵士たちと装甲車でニンジン色の森を通った時、背中に流れる冷や汗を感じたという。そして、まだ人生を、兵役を始めたばかりで事故処理に駆り出されたこの若者たちが哀れで仕方がなかった、と私に話してくれた。

6 月になってやってきた夫は、急性のヘルニアを発症したユーラの手術のため、私とユーラをチェ

ルニゴフに連れていった。朝早く私たちをチェルニゴフに送り届けた後、彼は勤務に戻っていった。2週間後、私たちはすでに退院しており、ヴィクトルはまた私たちに会いに来た。

新しい住居が支給されたのは8月半ばだったが、私が息子とそこに入居したのはやっと9月21日になってからだった。私は、当時支給されていた補償金で家具をそろえ始めた。キエフで暮らすようになってからも、私たちは騒がしい大都会の生活にどうしてもなじめず、プリピャチのことをなつかしんでいたが、その気持ちは今に至るまで残っている。歩いてもすぐに一回りするところのできた私たちの小さな町は、それほどちんまりと穏やかなところだったのだ。

そして時が過ぎ、ユーラは成長し、夫はやはり当直制で事故処理作業に通い、すでに当直班長になっていた。私は、汚染地域に通わず私たちと一緒にいてほしいと夫にせがんだが、彼の答えはこうだった。「もうお前の生まれた村に帰れなくなったとしたら、どう思う？」しかしその時、夫の生まれた村はすでに野原と化しており、店と村はずれの家が一軒ずつと、戦争の記念碑が残っているだけだった。穴を掘って村の建物を埋める作業が行われた時、ヴィクトルは、自分たちの家がどこに建てたのかわかるように、井戸のそばの白樺を残してくれと頼んだ。そして、当直勤務に通うたびに、必ずすでに存在しなくなった村を訪ねた。彼はそれほど故郷を恋しく思っていたのだ。

やがて、私は健康がすぐれなくなり、激しい頭痛が始まり、心臓がしょっちゅう支障をきたすようになった。5年の間に2人の子ども、ヴォーヴァチカとマリイカ[訳注：それぞれヴラディーミルとマリヤの愛称]が生まれ、ユーラは5歳になった。子どもたちは病弱で、私は家で子育てに集中していた。夫の健康状態も明らかに不安定になっていたが、彼はチェルノブイリでの仕事をやめたらという勧めに耳を貸そうとしなかった。入院して治療を受けるように頼んでも、彼はなぜかこわがっていた。ある時彼が私に言ったのは、「入院すれば、あとは死ぬだけさ」ということだった。どんなに彼を説得しようとしても、何の効果もなかった。彼は、娘を嫁にやるまでは死ねない、といつも自分に言い聞かせていた。私も家に救急車を呼ぶことがしばしばで、夫がキエフにいる時には入院して治療を受けていた。

夫は変わらずチェルノブイリで働いていたが、1995年、チェルノブイリで職員の給料に多額の未払いが生じた。職員たちはストライキを組織し、ストに参加した者には未払い分が支払われたのだが、夫が受け取った給料はわずかなものだった。私たちが生き延びられたのは、私の両親の援助のおかげだった。2000年に至るまで、給料の未払い額は膨らむ一方だった。夫が仕事を辞めなかったのは、いつかは未払い分をもらえるだろうという期待があったからだった。だが、現在に至るまでそのお金はもらえていない。

2000年の末、夫の健康はひどく悪化し、横になることも眠ることもできず、ただ立って歩くことができるだけだった。状態がひどく悪かった時、彼は私に言った。「タマーラ、俺はもう7年休暇をとってないな」それでもやはり、病院に行こうとはしなかった。恐かったのだ。11月には休暇をとって自宅で療養することにし、12月が過ぎ、1月の末にやっと病院に行き、レントゲン撮影をした。医師たちは、夫は結核にかかっていると言った。でも私は決してそれを信じなかったし、後で私が正しかったことがわかった。咳は全くなく、背中が激しく痛み、鋼鉄のたがで胸郭が締め付けられているかのような感じだった。夫はみるみるやせていき、検査結果はよくなかったが、超音波診断では何もはっきりしたことがわからなかった。

しかし、ソロメンカ地区病院で、超音波診断の先生が、夫は膵臓がんを発症していると私に言った

時、私は、足下の地面が崩れ落ちて行くかのような、一瞬意識が消えてしまったかのような錯覚にとらわれた。私は医師の宣告を信じたがらず、昼も夜も祈り続け、奇跡が起こると最後まで信じていた。夫の前では泣かないように精一杯努力したが、病院から家に帰る道すがら、涙がおのずと流れ落ちた。自宅でも、子どもたちの前では我慢して、神に助けを請い続けた。手術の前、ヴィクトルは泣いたが、私はすべてうまくいくと請け合い、一晩、彼は集中治療室から外科の病室に移された。夫の眼には、生命を永らえるという希望の灯がともったかのようなようだった。しかしその翌日、金曜日に、彼は再び集中治療室に戻り、希望の灯は消えてしまった。手術後 10 日目には、夫はもうこの世の人ではなかった。

私は生きる張り合いを失っていたが、3 人の子どもたちを育て、学校にやらなければならなかった。ヴィクトルのいない人生に意味はないと私には思えた。いつも泣き暮らし、私の健康もどんどんと悪化していった。治療は受けたものの、よくはならなかった。夫の死後 3 年経って、下の息子を失った時には、自分でも気が狂うかと思うほどだった。これで 2 度目、でもどうして私でなく、息子だったのだろうか？ 1 年の間、私はまるでロボットのように歩いているだけだった。2 人の子どもが残されており、私は彼らにとって必要なのだということは理解していたけれど、こんな傷跡を抱え、胸一杯に息を吸い込むことも、肩をまっすぐに広げることもできず、重荷に抑えつけられて何もできずに生きることがどんなにつらいことか。これからどうして生きていくのか、いつも恐れのお気持ちがつきまどっている。

私は、お金と医薬品の支援をして下さっている日本の善良な人たちに本当に感謝している。医師たちは高価な薬品を無料で処方することができないのだが、それらの薬は治療のために不可欠のものだからだ。子どもたちは病気なのに、自分のためにも子どもたちのためにも、高価な医薬品を買うことはとてもできない。大事なお友だちの皆さん、皆さんに神のご加護があり、いかなる不幸も悲しみも、皆さんの家を訪れることがありませんように。皆さんの善良なお気持ちに心から感謝しています。いつでもどこでも、私たちのもとで起こったような事故が決して起こりませんように。これで、私がどうしてプリピャチに住むようになり、そして今キエフでどのように暮らしているかについての話を終えたいと思う。世界の人々が幸福と愛に恵まれますように。

※本稿は「世界」2007 年 4 月号に掲載された。



亡くなった次男ヴォーヴァ、2001 年



長女マリアと長男ユーリイ、2004 年